

10月 18日 (日) 歴代上 15章	「神の箱を担ぐのは、レビ人でなければならない。彼らこそ、主の箱を担ぎ、永遠に主に仕えるために主によって選ばれた者である」(2節)。十戒の石板が納められた主の箱は、主なる神の臨在のしるし、永遠の契約そのものであり、彼らの礼拝の中心だった。私たちの礼拝の中心は十字架の主である。その主に永遠に仕える信仰をもって今朝の礼拝をささげよう。
19日 (月) 歴代上 16章	「主を求める人よ、心に喜びを抱き／主を、主の御力を尋ね求め／常に御顔を求めよ」(10-11節)、「恵み深い主に感謝せよ／慈しみはとこしえに」(34節)。今日、私たちは心に喜びを抱き、心からの賛美をもって主を求めているか。ダビデが国の真ん中に据えたのは主なる神を賛美する礼拝だった。今日、私たちも心の真ん中に礼拝を整えて一日を始めたい。
20日 (火) 歴代上 17章	「わたしは牧場の羊の群れの後ろからあなたを取って、わたしの民イスラエルの指導者にした」(7節)。ダビデ王の傍らにいつも預言者ナタンがいた。ナタンは時に厳しい主の裁きの言葉を直言し、主の恵みの約束を告げてダビデを祝福した。牧場の羊の群れの後ろにいる者を見守り導いてくださる方の真実によって、私たちは初めて正しい道を歩むことができる。
21日 (水) 歴代上 18章	「ダビデは王として全イスラエルを支配し、その民すべてのために裁きと恵みの業を行った」(14節)。王の務めは、民のために裁きと恵みの業を行うこと。その裁きは、事の善悪を示しつつ、神の恵みの業をあらわす大切な務めだった。「自分に都合良い、力による支配」がまかり通る世界にあって、神の恵みの業に基づく裁きを求める祈りが強められますように。

22日 (木) 歴代上 19章	「ダビデは…王の伝言として、『ひげが生えそろうまでエリコにとどまり、それから帰るように』と言わせた」(5節)。戦乱の世にあつては、国と国の間を不信と疑いが引き裂き、せつかくの好意も悪意に受け取られて新たな火種となっていく。その私たちの間を歩み、十字架において「敵意という隔ての壁を壊された」(エフェソ 2:14) 主イエスの祈りと働きを深く覚えて。
23日 (金) 歴代上 20章	「ダビデはその王の冠を王の頭から奪い取った。それは1キカル(34 kg)の金で作られ、宝石で飾られていた。これはダビデの頭を飾ることになった」(2節)。王冠を巡る血で血を洗うような争い。1キカル(34 kg)もの王冠を奪うために、どれだけの兵士の血が流されたことか。茨の冠をかぶり、私たちの罪のため十字架に向かわれた主の救いの深さを、今日、教えてください。
24日 (土) 歴代上 21章	「ダビデ王はオルナンに言った。『いや、わたしは代価を十分支払って買い取らなければならない。あなたのものを主にさげることにはできない』」(24節)。神への献げものは他人のものであつては意味がない。各々が自分の財布から痛みをもって献げるものでなければ意味がない。愛する独り子を深い痛みと共に献げてくださった神への感謝をあらわすものだから。
25日 (日) 歴代上 22章	「今こそ、心と魂を傾けてあなたたちの神、主を求め、神なる主の聖所の建築に立ち上がれ」(19節)。ダビデは主の神殿を築くことを願った。しかし、彼が大きな戦争を行い、多くの血を流したことによりとその願いは退けられ、その子ソロモンが神殿を建てる者とされた。それでもダビデは建築の準備を整え、主の神殿が建て上げられることを願う信仰に立ち続けた。